

第17回日本看護サミット青森開催 生命(いのち)をつなぐ看護

去る10月18～19日、青森市内にて第17回日本看護サミット青森'12が開催された。今回のサミットの分科会は4つ。「看護職が働き続けられる環境づくり——“看護師等の『雇用の質』向上”と“WLB推進”への取組」「診療報酬・介護報酬における看護の評価」「教育と臨床をつなぐ——新人研修とキャリアシステム構築」「地域でつなぐ看護——在宅医療の推進を担う看護職の役割」。いずれも大きな、しかし看護管理者としては避けては通れないテーマである。各参加者が抱える課題を共有し、今後進むべき方向性を考えるヒントとなる有意義なサミットであった。

「生命(いのち)をつなぐ看護」というテーマは、看護は人々の生活のあらゆる場面で保健・医療・福祉を支え、看護師は生命をつなぐキーパーソンとしての役割をもつこと、東日本大震災の経験を通して生命の重みを再認識したことから決定されたという。また、坂本すが氏(公益社団法人日本看護協会会長)は生命をつなぐとは「教育と臨床、病院と地域、そして看護と看護をつなぐこと」とも言えると述べた。

坂本氏は、基調講演「国民のニーズに応えるための主体的な役割と主な取組」において、急激な高齢化の進展により医療提供体制の変革が迫られている現状を示した。

そのなかでは少ないマンパワーで国民のニーズに応えること、ニーズの質的变化に対応するために活動領域を拡大・強化することが求められている。前者の課題を解決するには、チーム医療によりそれぞれの職種が専門性を

高めて協働するとともに、看護職がキーパーソンとしての役割を発揮すること、そして働き続けられるための環境づくり、一度辞めた人が復職しやすい環境づくりにより、看護職の定着を図ることが必要だ。後者の課題には、住み慣れた地域で暮らすことを支える、医療と暮らしの両面からの支援、よりよく生きることの支援、そして予防などQOLを高める支援の強化、組織を超えた看護職のネットワーク・協働が必要だ。これらの課題を受け、これから看護師の進むべき方向性を示したものが「日本看護サミット青森宣言」にまとめられている。

諸外国の看護師は日本に比べれば労働条件は良いと思われていたが、リーマンショック以降悪化していること、非正規雇用者が増えることで質についても課題が



生じていることが、国際看護師協会(ICN)ワークフォースフォーラムで報告されている。看護師の労働、質の問題は世界共通である。サミット実行委員長の齋藤文子氏(社団法人青森県看護協会会長)は、世界に類のない少子高齢社会を迎えたわが国において、看護が果たす役割はますます重要なものになっていると指摘した。

開会式において齋藤氏が「それぞれの立場で取り組むべき課題をお持ち帰りいただきたい」と述べたように、各分野の第一線で活躍する講師による分科会では、積極的な質疑もあり、各参加者の熱意を感じるサミットであった。

次回、第18回日本看護サミット愛知'13は2013(平成25)年10月30日(水)～31日(木)名古屋国際会議場にて開催。

